

令和7年度 学校(自己)評価計画書(最終評価)

石川県立松任高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
1 ICT活用や外部人材活用等により生徒の能動的な学習を推進するとともに、多様な進路選択を尊重し、進学や就職など希望に沿ったキャリアの実現を目指す。	コミュニケーション力を向上させるために、探究活動等による取り組みを通して、他学年や、地域や外部の方と積極的に関わる機会を設ける。	教務課 各学年	【成果指標】 総合的な探究の時間の活動において、他学年の生徒、または地域や外部の方と積極的にコミュニケーションを取っている。	「総合的な探究の時間における活動において、生徒のコミュニケーション力が向上した」と回答する教員の割合が A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	80% 評価A	10月の秋祭り、文化祭に向けて、他学年の生徒が協力する姿が見られた。各ゼミでの活動を活動報告書にまとめ、スライドを作成する過程で、他学年の生徒同士のコミュニケーション機会が自然と生まれた。今年度は年度後期に他学年の生徒同士が協力するイベントが多かったため、次年度に向けて、年度前期にも他学年の生徒同士が協力して行うことができるイベントができるよう、計画を立てたい。	Dの場合、教務課・学年で取り組みを再検討する。	7月と12月に教職員を対象に調査を行う。
	基礎学力の向上を図るため、ICT機器の活用や、自分の考えを書いたり、話したりする能動的な授業実践を通して、より一層生徒の学習意欲を喚起する。	教務課 各教科	【満足度指標】 ICT機器の活用や自分の考えを書いたり、話したりする授業によって学習意欲が高まった。	「私はこの授業においてクロームブック等を授業の理解を深めるために活用している」と回答する生徒の割合が A 80%以上である。 B 75%以上80%未満である。 C 70%以上75%未満である。 D 70%未満である。	89.4% 評価A 肯定的評価 1年 93.3% 2年 85.5% 3年 88.5%	R7の87.1%から上昇した。特に1年生は89.7%と元々高い割合から、93.3%とさらに上昇した。これは産社で職場体験の発表をパワーポイントを利用していることが要因であると考えられる。今後は他教科においても、発表等の活動を推進していきたい。	Dの場合、各教科で指導法を見直す。	7月と12月に生徒を対象に調査を行う。
	1年次より継続してきた進学希望者に対するガイダンス機能を向上させ、個別指導や支援体制を強化することで、第1希望への進学を実現できた生徒の割合が90%以上を目指す。	進路指導課 3学年	【成果指標】 希望進路への進学を実現できた。	3年生の進学希望者で進学先を決定でき、第1希望への進学を実現できた生徒の割合が A 90%以上である。 B 85%以上90%未満である。 C 80%以上85%未満である。 D 80%未満である。	100% 評価A	1学期から推薦入試や総合型選抜入試に向けた志望理由書の作成を進め、夏季休業中には面接練習を集中して行った。計画的に準備を進めてきたことで、出願等2学期に入ってからの指導をスムーズに進めることができている。一方で、生徒の基礎学力を向上させることが課題である。生徒の意識を高め、地力をつける指導を今後も継続させたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	100%を目標に年度末まで支援する。
	キャリアに対する意識を向上させ、就職希望者全員の内定を目指す。	進路指導課 3学年	【成果指標】 企業から内定を得ることができた。	学校からの企業紹介を希望する生徒で、企業から内定を得ることができた生徒の割合が A 90%以上である。 B 85%以上90%未満である。 C 80%以上85%未満である。 D 80%未満である。	100% 評価A	ここ近年、売り手市場が続いていることもあり、今年も引き続き多数の求人票が寄せられた。生徒たちは無事に希望した進路を決めることができたが、これから卒業までの期間を活用し、年金や税などに関する講座を通じて社会人としての自覚を持たせたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	100%を目標に年度末まで支援する。
学校運営協議会での評価			・良好な状態であると思う。先生方の努力に感謝したい。今後も地元へ貢献できる人材の育成に尽力してほしい。					
評価をふまえた今後の改善策			・基本的な生活習慣や学びの習慣が企業や地域社会が求める力に直結していることを踏まえ、教育活動を展開する。					
2 部活動や特別活動の活性化を図ることで、自己肯定感を高め、心身ともに健やかな人間力のある生徒を育成する。	部活動加入の促進とともに継続して部活動に参加することの大切さを理解させる。	生徒課 各学年 各部	【成果指標】 部活動の活性化に努め、継続して部活動に取り組む生徒の割合を維持する。	継続して部活動をしている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	76.7% 評価B	1年生の部活動加入率は78.4%、2年生は76.0%である。中学校で部活動に加入していない生徒もおり、高校での部活動への取り組み意識が低下している。また、運動部の部活動加入率が38.7%になるなど、団体競技の運動部ではチームとして成り立たない部活動も多い。対外行事だけでなく、学校行事で部員に役割を持たせるなど、部員としての存在意義を高められるようにしたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	4月末・9月末・1月末に集計する。9月末・1月末は1・2年生の割合を基準とする。
	部活動、生徒会、各種委員会及び学年での地域交流や地域貢献活動への参加の機会を増やす。	生徒課 総務課 各学年 各部	【成果指標】 部活動・学年等で地域(外部)の活動に積極的に参加する。	部活動等で地域(外部)の活動に参加した延べ回数が A 80回以上である。 B 70回以上80回未満である。 C 60回以上70回未満である。 D 60回未満である。	38回 評価D	運動部の部員数が減少していることもあり、単独での地域ボランティアが難しくなっている。生徒課が主体となり各部に働きかけてボランティアなどの地域貢献活動を企画していきたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	9月と1月に集計する。
	保健委員会を中心に、生徒全体に対して生活習慣確立の大切さについて伝え、自己の健康管理能力を向上させる。	保健相談課	【成果指標】 生徒は基本的な生活習慣を大切にし、自己の健康管理への意識を高めている。	「基本的な生活習慣を整えようとしている」と回答する生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	81% 評価A	生徒の結果では「私は平日、適切に睡眠をとろうとしている」と回答をした生徒は81%であるが、保護者の結果は68%であり、生徒の意識と保護者から見る実態にずれがある。保健委員会が行った研究発表のアンケート結果より1日のスマートフォン等の使用時間が5時間以上の生徒が42.9%もいる現状が分かったため、今後も引き続き生活習慣確立の大切さについて伝えていきたい。	Dの場合、取り組みを再検討する。	7月と12月に生徒を対象に調査を行う。
学校運営協議会での評価			・近年は、部活動に所属していても地域のクラブ活動に参加する生徒が増えており、一定数の未加入はやむを得ない状況ではないか。 ・新型コロナウイルス感染症の影響により地域とのつながりが希薄になっている。ボランティア活動などへの取り組みを、数年かけて段階的に再構築していくことが望ましい。					
評価をふまえた今後の改善策			・部活動や地域活動を取り巻く環境の変化を踏まえ、短期的な成果を求めるのではなく、地域との関係性を徐々に回復させながら、無理のない形で活動の充実を図っていく。特にコミュニティスクールとして掲げた「地域振興」「地域防災」について、生徒の学びの場と視野を地域に広げる取り組みを進める。					

重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)	判定基準	備考
3 挨拶の励行、端正な服装容儀、遅刻・欠席の減少等、望ましい生活習慣を確立させ、心豊かで安心・安全な学校づくりを促進する。	1 登校時の挨拶運動や授業の開始と終了の挨拶、教職員による廊下での声掛け等を充実させ、挨拶を実行する機会を増やす。特に朝の登校時においては、挨拶を自分から自然にできる生徒を増やす。	生徒課各学年	【成果指標】生徒会、部活動、生活委員、PTAと協力し、年4回の挨拶運動を行い自分から挨拶する機会を増やす。	自ら挨拶をしている生徒の割合が A 90%以上である。 B 85%以上90%未満である。 C 80%以上85%未満である。 D 80%未満である。	83% 評価C	中間評価とは増減なく、昨年度と比べて3%減少した。挨拶については、部活動において身につくことも多いため、部活動加入率や活動状況にも多岐に影響されている。今後は授業時での挨拶の励行や教員による早朝玄関指導または遅刻指導の際における生徒への声掛けを通じて挨拶ができる生徒の割合を高めたい。また、あいさつに限らず、日常の生徒への声掛けを続けることで挨拶ができる生徒を増やしたい。	CまたはDの場合、指導法を再検討する。	7月と12月に生徒を対象に調査を行う。
	2 生徒が端正な服装容儀で学校生活に臨むことができるようにする。	生徒課各学年 総務課	【成果指標】端正な服装容儀を常に心がけ、注意を受けることなく学校生活に臨んでいる。	服装容儀で指導を受けることなく、学校生活に臨んでいる生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上90%未満である。 C 70%以上80%未満である。 D 70%未満である。	97% 評価A	昨年度は96%であった。正しい服装容儀を意識して学校生活に臨んでいる生徒が多い。しかし、「あてはまる」と回答した生徒の割合は、1年生76%、2年生58%、3年生61%となっており、学年が進むにつれて悪化していることがうかがえる。本来は模範となるべき高学年の生徒に対して、毅然とした指導が必要である。	CまたはDの場合は、指導法を見直す。	7月と12月に指導した割合を算出する。
	3 職員全員で登校指導時に遅刻防止を呼びかけるとともに、定期的に集会で啓発する。また、各生徒の遅刻の回数を把握し、常習者には保護者との連絡を取って遅刻防止に取り組む。	生徒課各学年	【成果指標】職員は組織的な指導を行い、生徒に時間を守る習慣を身に付けさせる。	年間の「遅刻改善指導」の対象人数が、前年と比較し A 80%未満である。 B 80%以上100%未満である。 C 100%以上120%未満である。 D 120%以上である。	110% 評価C	今年度、対象となる生徒数は83名であった。(昨年度は75名) 近年、不登校傾向の生徒の遅刻、体調不良による遅刻、悪天候による登下校時の安全への配慮を理由とする遅刻が増加する傾向にある。しかし、日常的な遅刻や不注意などによる遅刻を繰り返す生徒も多く、保護者と連携を取って生活改善に努めたい。	CまたはDの場合は、指導法を見直す。	中間集計及び年度末に最終集計を行う。
	4 学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめの早期発見・未然防止に取り組んでいる。	生徒課相談室各学年	【成果指標】生徒間で、いじめを許さない、見逃さないという意識を高める。	「いじめをしない、いじめを見逃さない」と回答する生徒の割合が A 90%である。 B 85%以上90%未満である。 C 80%以上85%未満である。 D 80%未満である。	95% 評価A	昨年度は91%であった。引き続きいじめをしない、見逃さない指導を続けていくとともに、生徒にはどのような行為がいじめとなるか啓蒙するとともに、いじめとなる行為があった場合の相談先について周知していきたい。	CまたはDの場合、生徒への指導を再検討する。	7月と12月に生徒を対象に調査を行う。
	5 職員全員が連携し、問題を抱える生徒の早期発見と支援及び問題行動の未然防止ができるようにする。	保健相談課各学年	【成果指標】教職員の連携を密にし、生徒一人ひとりの理解を深め、組織的に対応し早期支援ができる。	「職員間で気になる生徒の情報を共有し、関係機関と連携し、組織的に生徒の支援ができている」と回答する職員の割合が A 100%である。 B 90%以上100%未満である。 C 80%以上90%未満である。 D 80%未満である。	97% (a+b) 評価B a あてはまる 62% b やや 34% c あまり 3% d 全く 0%	「気になる生徒」は多様化し続けている。相談委員会においては、学校でできることを明確にし、職員の連携を強化し、校内の組織的対応による早期支援に務めている。また、関係機関と連携し十分な支援を目指している。相談委員会で共有した生徒情報をもとにスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、ヤングケアラーカウンセラー、発達障害アドバイザーの支援協力を得ることができた。	CまたはDの場合、職員間の連携および外部機関との連携のあり方を再検討する。	7月と12月に職員を対象に調査を行う。
学校運営協議会での評価			・挨拶について、生徒は会釈も挨拶の一つとして受け取っている可能性があり、教員や地域が求めている挨拶の姿との間に認識のずれがあるのではないかと。 ・自己肯定感の低さや人間関係の希薄さが挨拶のしにくさにつながる。外部との関わりが増えることで、自然と声を出した挨拶ができるようになるのではないかと。地域の大人など外部人材を積極的に活用してはどうか。 ・制服の着こなしについて、世代間のギャップを感じる。単に注意や指導を行うだけでなく、「制服とは何か」「制服を着る意味」について、生徒自身に考えさせる指導も大切ではないかと。					
評価をふまえた今後の改善策			・挨拶について、量や形式を求めただけでなく、望ましい挨拶の姿を具体的に示し、外部との関わりや成功体験を通して、自己肯定感を高めながら育成していく。制服や身だしなみについても、規則の遵守を求めただけでなく、その意義や目的を理解させる指導を通して、主体的な規範意識の育成につなげていく。					
4 生徒・保護者・地域の理解を得ながら教職員の多忙化改善を図り、質の高い教育活動の継続に努める。	1 職員がワークライフバランスを意識して計画的かつ効率的に業務を遂行する。	教頭	【成果指標】仕事の効率化や時間外勤務時間の削減を意識し、月80時間超えの職員を減らす。	時間外勤務時間の一ヶ月の平均が80時間未満の職員の割合が A 100%である。 B 90%以上100%未満である。 C 80%以上90%未満である。 D 80%未満である。	97% 評価B 4月～8月のべ 6名 9月～1月のべ 4名	超過勤務の大きな要因として土日の部活動、大会運営に関わる業務が挙げられる。また、生徒指導に関し、生徒面談や保護者との懇談などにより時間外勤務が必要となった。業務の性質上時間を短縮することや分担が難しいが、特定の教員に業務のかたよりがでないよう、業務全体を俯瞰し、見直しや効率化を進めていきたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	毎月の勤務時間調査の平均値で判断する。
			学校運営協議会での評価			・教員の働き方改革は、ニュースなどでも話題になっている。協力していきたい。		
評価をふまえた今後の改善策			・コミュニティスクールとしての生徒の学び方や学校の在り方の変化に合わせ、地域のカも借りながら教員の働き方も改善していく。					
5 中学や外部との連携を密にし、本校への理解を図る。また、広報活動を充実させ、地域から信頼される学校づくりに努める。	1 災害時にも対応できる安全な学校環境の構築を目指し、地域と連携しながら防災教育の充実を図る。	総務課各学年各課	【満足度指標】保護者に向けたメール配信やホームページの情報の更新を随時行い、学校の防災教育の取り組みに対する理解を深める。	「学校は、地域と連携しながら充実した防災教育を行っている」と回答する保護者の割合が A 80%以上である。 B 70%以上80%未満である。 C 60%以上70%未満である。 D 60%未満である。	63% 評価C あてはまる 26% やや 37% あまり 26% 全く 11%	後期の学校行事の公開や広報により肯定回答は中間評価より10%向上したが、63%に留まった。特に地域からの行事参観者が少なかった点は、次年度の課題であると考えている。今後は備蓄庫の整備等のハード面を拡充しつつ、HPや回覧板等での発信についてもさらに工夫し、地域とより密接に連携できる活動内容を再考したい。保護者や地域の方々に参加しやすい防災教育の形を探り、一体となった防災体制の構築と安全な学校環境の実現に努めていきたい。	CまたはDの場合、取り組みを再検討する。	7月と12月に保護者を対象に調査を行う。
			学校運営協議会での評価			・学校だけでなく、町の人々とも連携した防災訓練を実施してはどうか。 ・地域と連携した防災教育を行っていることについて、PTA活動に関わっていない保護者には十分伝わっていない可能性があり、別の周知・発信方法を検討してもよいのではないかと。 ・防災に関しては、行政機関も巻き込みながら進めていくことで、より実効性の高い取組になるのではないかと。協議委員に行政の方も参加するのが良いのではないかと。		
評価をふまえた今後の改善策			・防災教育については、地域住民や行政機関との連携をさらに深めるとともに、取組内容を広く保護者に伝える工夫を行い、学校・家庭・地域が一体となった体制づくりを進めていく。					